

**塩竈市・多賀城市・松島町・利府町・七ヶ浜町の  
婦人防火クラブ連合会ヒアリング記録**

日 時 2011年10月25日（月）9:30～

場 所 塩釜地区消防事務組合消防本部

参加者 後藤 重子 塩釜地区婦人防火クラブ連合会会長  
多賀城市婦人防火クラブ連合会会長（大代地区）  
渡邊 洋子 塩竈地区婦人防火クラブ連合会 副会長  
七ヶ浜町婦人防火クラブ連合会会長（菖蒲田浜地区）  
郷家 百合子 塩竈地区婦人防火クラブ連合会 副会長  
利府町婦人防火クラブ連合会会長（浜田地区）

## 1. 背景・概要

塩釜地区は宮城県仙台市のすぐ北隣りで、塩竈市・多賀城市・松島町・七ヶ浜町・利府町から成っているが、震災前の人口と世帯、震災と津波による被害は下記の通りである。

仙台市内から名勝松島湾のある松島町へは、石巻へ通じる仙石線が太平洋に面したこの地区一帯を駆け抜けるような形で走っており、にぎわい、美しい自然の景観、湾岸の工場やコンビニート、漁村など、それぞれに多様な顔が見られる地域となっている。

婦人防火クラブの活動は以前より、この地区一帯で熱心に取り組みが行われており、東日本大震災においても、直後よりその力を発揮して、地域の状況に応じた相互扶助活動が行われている。

なお、塩釜地区消防事務組合消防本部の資料等によると、消防本部の建物自体はぎりぎり浸水を免れたものの、一帯は地盤沈下し、津波広報中に水没した車両もあった。その後の救助活動も厳しい状況で展開されたことが分かる。

### 塩釜地区の震災前の人口・世帯数と被害状況

市町名	人口	世帯	死者	行方不明者	全壊 (棟)	半壊 (棟)
塩竈市	56,518	20,319	33	1	758	3,722
多賀城市	62,913	24,045	188	1	1,687	3,255
松島町	15,089	5,149	2	—	215	1,422
七ヶ浜町	20,419	6,415	70	5	729	460
利府町	34,000	10,819	46	—	52	746

※人口と世帯は平成22年度の国勢調査速報、被害は2011年11月13日現在の宮城県発表による。

## 2. 詳細

### ①それぞれの避難・対応状況

#### ■後藤 重子 さん（多賀城市）

3月11日は、買い物帰りに地震に遭ったが、家に向かうと手前の路地に瓦礫等が散乱して入れない。近所の男性たちがよけてくれてようやく家に入るが、中はぐちゃぐちゃの状態。

夫は日頃から酸素吸入が必要な状態で、自分で必要なものを一式箱にいれ、車で逃げようとトランクに積んだりしていた。その間、大津波警報が出ていたのは知っていたが、まさかここまで、という思いでいたので、逃げる準備を続けていると、みるみる側溝があふれてきて、仕方なく近くのアパートの2階の通路に上がって呆然と津波が町を覆うのを見つめていた。階段を上がってすぐの部屋の男性が、どうぞ中で休んでくださいと中へ招いてくれたので、夫だけでもお願いして入れてもらった。波が引く瞬間があったので、その際一度だけ家の中を見に行くと、ヘドロなどで泥らだけになっていた。

近所の人たちが近くのホテルに避難していたので、しばらくしてからホテルへ移動した。その後、近くの工場で爆発事故があり、自衛隊の多賀城駐屯地に移動することになった。街中は冠水しているため、水の中を歩いていってから車に乗り、駐屯地にある宿舎の3階に入った。そこへ、ずぶぬれになった被災者などが運ばれてきたので、自衛隊の人を手伝って着替えさせたり、持ち合わせの服などを着せるなどした。

3日間そこにいさせてもらったが、全国からの自衛隊の応援が入ってくるということで、東豊中学校に避難することになった。避難所では自治会長がリーダーシップをとって炊き出しがおこなわれていたが、知人に、「手伝って!」と言われ、荷物を置くかおかないかという間にすぐにお手伝いに入った。もちろん自分の地元の大代地区の人がこの避難所にたくさん入ることになったので、それは当然だと思った。当初は、商店街を回って肉やカレーのルーなどを寄付してもらって材料とした。

4月9日まで避難所での炊き出しを毎日おこなったが、自宅の片付けもあり、往復しながらだった。地域のみなさんには交代でやっていただいたが、わたしを含む中心メンバーは毎日手伝った。

夫は途中で入院し、その後は高崎の妹のところへ静養させてもらったが、わたしは4月10日に自宅へ戻り、2階で過ごしながら建設業している親戚にリフォームをしてもらい、5月20日には自宅できちんと暮らせるようになり、夫を連れ帰った。

#### ■渡邊 洋子 さん（七ヶ浜町）

私は七ヶ浜町の学習センター・老人福祉センター「浜風」の事務職の嘱託職員として働いている。介護の資格ももっており、以前はデイサービスセンターで嘱託職員として働いていたが、別の仕事を経て現在は事務職の嘱託職員となっている。そのため、公民館の建物に併設されている、福祉系の仕事をお手伝いすることもあり、あの日地震が起きたときは、老人保健施設の送迎者の乗務員をしていた。

七ヶ浜町は半島状で、7つの浜と内陸の地区で構成されており、バスはその半島の周りをまわるような形で、高齢者が乗り降りして、施設を利用しに来られるようにしている。一応身の回りのことはある程度自分でできる動けるお年寄りが利用者である。

地震が起きたときはバスが大きく揺れ、普通ではなかったもので、たいへんなことが起きたと思った。地震後、最初にバスから下ろした老人は、近所の人だったので、一緒に高台に逃げてもらうようお願いした。バスは一度役場に戻るかどうか迷ったが、道路を進むことができなかったのでそのまま生涯学習センターへ向かうことにした。途中、非常に危険な大きな地割れなどもあったが、運転手さんがいち早くに気がつき、よけながらさらに進んだ。図書館や他の施設も大きな被害を受けているのを見

ながら、午後2時50分ごろセンターにたどりつくと、屋上の水槽が破損して施設を水浸しにしていた。当時館内にいた人に聞くと、ものすごい大きな音を立てて壊れ、ざーざーと水がもったという。施設にきていた近所のお年寄りたちは、わたしが無事なのを知ると安心して帰っていった。

わたしの家のある菖蒲田浜地区では、自宅も公民館も大体海拔9mのところにあるが、津波の大きさが12mと聞いて、もうだめだろうと思った。後日話を聞くと、はじめは地区公民館の一階にみな避難していたが、大きな津波にあわてて2階に上がろうとしても、足が上がりなかつたり転んだり混乱したという。最後に上がった消防団長は津波をかぶり怪我もしたという。

わたしのいたセンターは、各地区からたくさんの人が逃げてきていたが、水浸しで入れない。役場の許可も何もなかったが、とりあえず無事な建物に一定の人を誘導して入ってもらった。1日目・2日目はとてもではないが部屋を分けるといった配慮はできなかった。近くのコンビナートでの爆発後はさらに人が増えて、たいへんだった。

19歳の時に宮城県沖地震を経験しており、地元は津波が来ると孤立する地区なので、普段から車には一泊できるぐらいの物資を積んであった。また着替えになるズボン等も何着かと、オムツ、菓なども入れていた。また携帯電話から知人の医療関係者に一斉メールをして、応急救護方法をそのつど教えてもらったり、また状態がとてもひどい人は病院に送ったりした。

3月15日に、知り合いのクリニックから医療チームが入ると聞いてようやく安心したのを覚えている。九州も含めた各地から駆けつけてくれたが、医療チームの皆さんには、最初は母子センターに宿泊してもらい5~6箇所の避難所を回ってもらった。

11日目の夜に、甥の友人が東京から支援に来てくれ、とりあえず役場でどうすべきか聞いてもらって給水ボランティアから初めてくれたが、その後彼は、決まっていた就職口を止め、現在、NPO法人のスタッフとして、仮設住宅の支援に従事している。

ずっとセンターにいたので、菖蒲田浜地区の様子は直接みてはいなかったが、残ったのは高台のところだけと聞いていた。自分の家が流された話をきくのはいやだった。

地区の防火クラブ員の方が、わたしに「何か手伝うことはないか？」と聞いてくれたが、みなさんも自宅で、下の地区の人たちが逃げてき人たちを受け入れていた。そのため、みなさんの負担を増やしたくないし、基本は家庭の防火防災だとの考えから、「みなさんはいま受け入れている地域の方のお世話でがんばってください。こちらは大丈夫です」と伝えた。

地区によって状況はいろいろで、塩見浜では避難所の支援、東宮地区は高齢者支援など、婦人防火クラブのみなさんはそれぞれに頑張ってくれていた。婦人防火クラブの活動のあり方は、災害によって変わることもあると思う。

センターでは、初日は役場からのおにぎりをいただき、2日目からは自衛隊が入ってきてくれたので、炊き出しのご飯を出してもらうようになった。1週間経ったころから、みんなで当番制にして、住民から交替で10人ずつ出してもらい、役場から食材をもらってきて調理した。公民館の厨房で作り、施設内と駐車場で避難している人、全部で1千食分を炊き出した。

また、元の地域に残って生活している在宅避難者の人は、お店もだめになっているし橋が通行できないため、買いにも行けずに非常に困っていた。そこで、センターの責任者に話しをして、高齢者や体の不自由な方の方に対して物資をお分けすることにし、朝4時半に車に物資を積んで、オムツなども含めて配って歩いた。

一週間してようやく家の様子を見に行ったが、門柱だけがしっかりたっていた。いまも残してもらっていて、そのままになっている。じぶんは小さいころから津波来るといわれていたので覚悟はあり、もうだめだと思っていた（しかし、やはりとてもつらい）。

一か月半以上物資の配布もさまざまに工夫して行っただが、自分は役場の名札を付けているため、もらいにくく、実際殆どいただいていない。

現在は、仕事前と仕事後に仮設住宅（7箇所）を回って、高齢者の方へ声かけもしている。

## ■郷家 百合子 さん（利府町）

私は七ヶ浜町と接する形で建てられている、新仙台火力発電所で事務の仕事をしており、震災のときは事務所の給湯室にいた。事務所は机から棚からすべてボルトやビス、ベルトで固定していたが、それでも食器が落ちるのはもちろん、たいへん揺れてこれは一大事だとおもった。

3月9日のお昼前にも揺れがあったためすぐに避難したが、その経験もあって3月11日も上着を着て貴重品をもち、ヘルメットをかぶってスムーズに避難。タービンプラントがビルの3・4階の高さになるので、その上に避難して様子を見た。電気は消えて情報もなかったが、ワンセグのテレビで情報を取っていた人がいて、10mの津波が来るといっているので窓から見ていると、海面がぐーっともりあがって一気に発電所に海水がなだれ込んできた。

周囲では、自動車のライトが勝手に点滅したりクラクションがなったりしてたくさん流されていったが、津波の大きさに、わたしたちはさらに上のボイラー室の屋上に登れといわれ、雪の中さらに上に移動した。しかし、女性たちだけは屋内になる中央制御室へ移動することになり、3～40人で移動して毛布や防寒着をいただいて中で休むことができたが、余震が続きとても眠れる状況ではなかった。男性たちはボイラー室の屋上の吹きさらしの状況で一夜を明かした。隣接するJX日鉱日石では爆発と設備の火災が起きていた。

翌日昼近くになって、水を入れるとあったかい食事が食べられる非常食が配られ、それを食べていると、JXがさらに爆発しそうなので20キロ圏内は避難するよう指示された。遠回りだが海岸線をまわって5・60人で歩いて避難していると、途中、瓦礫の間にウニやカレイやボラが転がっているのにおどろいた。

本来は向陽中に避難することになっていたが被災者が多かったのも、それぞれに避難することにした。わたしはいとこが近くの松ヶ浜にいたのでそこへいくと、大変だったねと暖かく迎え入れてくれて、そこで2日目を明かした。実家は渡邊さんと同じ菖蒲田浜だが、見に行くと実家の脇のブロックべ塀で波が止まっていた。松ヶ浜小学校が避難所になっていると知り、親族を探しにいくと、義理の兄弟と無事が確認しあえた。

3日目によく利府町浜田地区の自宅に帰ることができた。家族と早くに無事の確認がとれていたのとお互い心配は少なかったが、戻ると玄関の先まで波が来たようで、もう一台の車がだめになっており、土砂もある程度家の中に入っていた。浜田地区では50軒以上が床上か床下浸水した。

おばあさんは浦島荘というホテルに、地域のひとたち3～40人と避難しており、食事はホテルが提供してくれていたの、わたしは日に一度、果物などを差し入れにいった。

また、民生委員も引き受けているので、高齢者の家などを訪ねあるいて一軒一軒安否確認をおこなひ、「自宅にいて不安だったり不自由があったら、浦島荘に遠慮なく来てください」と伝えた。中には痴呆の症状がありながら震災後しばらく家族が面倒を見られない状態だった方もいて、朝・晩とご飯を運んだが、火の始末が大丈夫か不安で、注意して声掛けを続けた。

地区には鹿島建設ほか工事関係者の拠点事務所などがあり、そこに救援物資がたくさんとどいたため、浦島荘にもその一部を提供してもらっていた。それらの物資の一部は、袋に小分けして、防火クラブのジャンパーを着て会員さんと手分けをし、高齢者のみ世帯や障がいもった方で在宅避難している方たちに配布した。給水車が来ると、順番待ちの列の横でやはりジャンパーを着て、横入りや混乱がないよう整列のお手伝いをした。

従来から地区の避難所として指定されていた施設にも泥が入ったので、婦人防火クラブのメンバーでそこを片付けて、地域に対して物資が来た際の物資置き場とした。あとで不平がでるとたいへんなので、物資と配布先をリストアップしてホワイトボードに書き出すなどし、漏れがないように注意を払って配布をおこなった。また、近所の方をお風呂に入れるといったこともした。

利府町の中心部は津波被害がなかったのも、婦人会やボランティアの方たちが集まって炊き出しなどをしていたという。

## ②全般（個別課題など）

## ■避難生活

○被害があまりにひどく、地区リーダーの不在による混乱というものも見られた。自治会も動かないので、在宅支援など考えられないような状況だった。

○トイレが大変だった。途中でもう掘って埋めようということになり、施設側には相談せずに住民たちで作業を進めた。

○食事はシビアだった。何度でももらいに来る人がおり、「みんなに平等に配っているのだから横入りしないでくれ」と呼びかけるなど大変だった。また、アレルギーのある人もいて、毎回材料を報告するなどの苦労もあった。

○高齢者向けのおかゆ、アレルギーの人用の食事などにわけて対応した。

○支援物資ははじめ、机が押されるぐらいに人がつめかけ大変だったので、途中から会場を分けたり、同じものをみんなに配ることができるまで物資が集まってから、一人ずつ配るなど工夫するようにしたが、一か月半つづけて大変だった。

○一日中支援で走り回っており、トイレに行く間も無い。かつてヘルパーもやっていたことから、自分はおむつを二枚はいて、それで済ませていた。

○膀胱炎にならないよう、水分は取るようにして気をつけていた。

○高齢者はしゃがめないので仮設トイレは使えない。そこで、様式トイレにたまった中身を掻き出し、そこにビニル袋を入れ、新聞紙を引いて使ってもらうようにした。

○トイレ掃除は、3人の仲間と毎日継続して行った。

○お風呂は14・15日目ぐらいにようやく入れた（後藤）。3月28日に試し利用でようやくお風呂に入った（渡邊）。

○20日ぐらいして、郡山から娘が来てくれて初めて泣けたが、それまでは気を張りとおしだった。

○若い方も、ストレスや高血圧などからであろうが、脳梗塞や顔面麻痺の症状が出る人がいた。

## ■仮設住宅

○現在、化粧品会社の支援によって実施されている、ハンドマッサージとメイクによる癒しのボランティア活動をお手伝いしている。多賀城市の他の地区の防火クラブ員にも声をかけて、できる範囲で仮設住宅などをお尋ねして、お話を聞きながらマッサージなどをさせていただいているが、つらいお話をされるかたも多い。仮設住宅での防火啓発も検討している。

○七ヶ浜ではレスキューストックヤードというボランティア団体が組織として緊急救援期から継続して支援してくれており、仮設住宅でのコミュニティづくりに貢献しようと、先日は一緒に仮設住宅での表札づくりを行った。

## 3. 今後に向けてとメッセージ

### ■分析

○お話をうかがった多賀城市・七ヶ浜町・利府町を含む塩釜地区一帯では、地震・津波への意識が高く、婦人防火クラブ員は直後より、命と健康をつなぐための力を大いに発揮している。

○避難者の誘導、避難所運営、在宅避難者の支援などについても状況に応じた活動を、会員の力を引き出しながら実施しており、こうした活動は日ごろからの訓練や地域や暮らしに根差した組織と会員の在り方そのものが基盤となっているといえる。

○地域組織（自治会・町内会ないしはそれを母体とした自主防災組織）と婦人防火クラブの協力関係

については、よい連携がとられている好事例とともに、婦人防火クラブの力がよりよい形で発揮されるよう、再検討されることが期待される事例も見られた。

○被害がひどかった地区は活動を休止せざるを得ないケースが多く、総会などは延期や中止などになっているが、どの市町でもこれまで通り婦人防火クラブの活動を継続する方針であり、できるとからできる活動を、ということで、防火研修への参加や、仮設住宅での防火啓発活動への参加など、会員の意欲は高いレベルで維持されている。今後も、地域防災の重要な担い手としての活動が期待される。

## ■組織の今後

### ○多賀城市

\*市内には12クラブあるが、7月に会長さんたちに集ってもらい、まずは実施できなかった総会を文書を送付することで行うことにした。また、各クラブの活動をどうしていくかについても話し合ったが、4地区は被害がひどく休止の状態。また、市役所もどうしたものかという感じであった。しかし、出来る地区は少しずつでも取り組もうということで、徐々に活動を再開している。仮設住宅の防火啓発の検討も行っている。

\*多賀城市では婦人会はあまり大きくなく（婦人会は任意加入で婦人防火クラブは全戸加入のため）、婦人防火クラブは50代などの働いている女性や若手もいるため、会合に出やすいように理事会は夜行うようにしている。役員は1年交代が多い。ボランティア活動なので、楽しくやりましょう！というのが信条で、笑いあって会合ができるよう心がけている。また、婦人防火クラブの意義も、常に丁寧に説明するようにしている。

\*自主防災組織において婦人防火クラブが応急救護班を担う形でよい連携はとれていると思う。応急手当普及員もすでに市内に40人ほど育っている。

### ○七ヶ浜町

\*七ヶ浜町は、7つの浜側の地区とそれ以外の5地区の全部で12地区があるが、9月6日によりやく理事会を開催できた。4地区は被害が大きく活動が難しいが、他は継続できるので、防火などの広報活動は取り組んでいくこととした。また、このような状況であっても、広域で実施される防火研修に参加したい、という意欲的な声が上がっている。

\*役員交代は2年ごとで、次の春が改選となる。

\*10月29日は、障がいを持った方や寝たきりの方も暮らす仮設住宅で避難訓練があるので、広報や準備に携わっている。また、同じ日に芋煮会の企画もあり、こちらにも婦人防火クラブは参画している。

\*七ヶ浜にも各種女性団体連絡協議会があるが、婦人防火クラブはそこには入っていない。自主防災組織では婦人会の方が中心で、婦人防火クラブは50代以下のお母さんたちが担うような形となっている。

### ○利府町

\*津波被害を受けたのは浜田地区だけであったため、6月21日に理事会を行い、これを総会に代えた。毎年6月に宮城沖地震を教訓に大規模な防災訓練をおこなっていたが、今年度は中止となった。また週に一度、火災予防を各小学校でよびかけるモーニング運動を市内全域で実施してきたが、これは継続している。

\*利府町の婦人防火クラブは、基本は全戸加入とはいいながらも、団地など加入の無いところも一部あり、そうしたところも含めて広報活動には力を入れている。

\*また、各地区で自主防災組織（町内会が主体）と婦人防火クラブは協力しあって活動している。婦人会と会員が重なっており（婦人会の中に婦人防火クラブと交通安全母の会が入る形）、婦人会の副会長が、婦人防火クラブと交通安全母の会の会長を努める形となっている。

\*利府町女性団体連絡協議会があり、婦人防火クラブを含む6団体で構成しているが、その総会の担

当が今年も婦人防火クラブだったため、その日に合わせて応急救護教室も実施して、大変好評を得た。また、被災体験についてもお話をさせていただくことができ、よい集まりになったと思う。

## ■メッセージ

○全国の婦人防火クラブのみなさま、ありがとうございます。一日も早く被災地に笑顔が戻るようにしたい。

○一日も早い復興を、と思うのと同時に、でも頑張りすぎず、つらいときにはつらいと言っていいと、そういう声掛けも大事だと思っている。マッサージやお化粧品などといったことを通した心の癒しも本当に重要だと感じている。

○家を失い、ご遺体もたくさんみだし、まだ同級生がみつからないような状況ではあるが、一步一步前進していきたいと思っている。夏には復興祭として花火が打ち上げられ、かつて浜辺に咲いていたハマナスを植えるといった活動もしている。全国のみなさんに感謝をしつつ、頑張っていきたい。

○日本防火協会を通じて募金を頂戴しているが、今後そのよい形での活用を考えていきたい。本当にありがとうございました。

(以上)